

他者とのつながりを生み出す読書

～一人一人の読書体験の表出を通して～

宮脇 隼

本研究では、文部科学省【第2 国語力を身に付けるための読書活動の在り方】では述べられていない読書を会した他者とのつながりに重点を置いた。そこで、本研究では読書を通した他者とのつながりを生み出すしかけや、コミュニケーション力を育てるための手立てを考え実践した。成果として、いくつかの仕掛けを作ることで、ただ毎日決められた時間を読書するという読書体験から、自分の読書を知り、自分の読書を見直すための取り組みとなった。それが、子どもたちをみとるためのものとなり、今まで以上に子どもに対する支援や評価をすることができた。しかし、他者とのつながりや授業とのつながりの部分では、まだまだ改善すべき点が多い。

キーワード：読書、国語力、コミュニケーション力、つながり、読みの表出

1. 研究目的

文部科学省【第2 国語力を身に付けるための読書活動の在り方】によると「読書は、国語力を構成している『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』『国語の知識等』のいずれにもかかわり、これらの力を育てる上で中核となるものである。特に、すべての活動の基盤ともなる『教養・価値観・感性等』を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なものである。」とある。(平成16年2月3日 文化審議会)

このように読書によって国語力が育まれていく。そして、国語の学習は、知らなかった作品や作者と出会いを生み出し、気づかなかった読みを知ることで子どもたちにとって次の読書に対する意欲を高める場となる。つまり、国語科の学習で読書に対する意欲を高め、その意欲が次の読書体験を生み、新たな国語力を身に付けることにつながっている。読書と国語で子どもたちの国語力を育てていきたいと考えている。また、読書は人の人格形成にも大きなものをもたらしてくれる。

しかし、文部科学省【第2 国語力を身に付けるための読書活動の在り方】では述べられていないことがある。それは、読書を会した他者とのつながりである。そこで、本研究では読書を通した他者とのつながりを生み出すことや、コミュニケーション力を育てることを目的とした。

本学級には、読書することが好きな子が多い。朝の読書タイムや、教師や図書ボランティアの読み聞かせを楽しみにしている。そんな子どもたちなのだが、自分の想いをもつことや、感想を交流することが苦手な子が多かった。子どもたちの読書を見ると、個人で完結し、そこから得ている国語力を十分表出させていないと感じた。そこで、個人で完結する読書を、他者とながらうことで国語の力を働かせ、見える形で表出させようと考えた。

子どもたちの、読書体験による成長を国語の学習での感想文や発言だけで教師がみとり、評価することは難しい。そこで、国語の学習だけではなく、朝の読書タイムや図書の学習を使い、ただ漠然と一人一人が読書をする時間にするのではなく、読書で得た力を表出させ、読書による成長みとるための時間とした。また、本実践で重点を置いているのは読書を通して他者とのつながりをもつであり、子どもたちが主体的に自分の読みを相手に話すことや、相手の読みを聞き、自分の読みを再構成することで読書による成長が見られると考えた。そのためにも、つながりを生み出すための実践を進めることとした。

2. 研究方法

本実践では、国語の学習はもちろん、朝の読書タイムや図書の時間、または休憩時間などの読書の時間も一人一人の成長を自己や他者も感じることができるようにした。そのために、取り組んだことは、一人一人の読書体験を表出させることだった。そのための手立ては以下の通りである。

- ・マイディクショナリー
- ・読書プラスノート
- ・国語でのノート、ワークシート

本校の取り組みとして、本年度から朝の10分間の読書タイムが「読書プラス」と名称が変わった。その変化は、ただ読書を静かにするといった時間から、各クラスにおける読書に関する取り組みをする時間となった。そこで、本学級では3つの取り組みを行った。1つ目は、「マイディクショナリー」を作るための時間。2つ目は、「読書プラスノート」を書く時間。3つ目は、国語科の活用時間である。

この取り組みをすることで、子どもたちの実態をみとり、日々の国語学習とのつながりを生み出すことで、より国語学習への意欲を高めることができると考えた。

また、子ども一人一人が今の自分にとって大切なことや、クラスのみんで取り組んでいることなどを常に意識して、意欲的に取り組む毎朝の10分間にさせたいと考えた。

3. つながりを生み出すための取り組み

3. 1. マイディクショナリー

本学級では、図書の時間や朝の読書時間を利用して「マイディクショナリー」作りに取り組んでいる。子どもたちには、一人一つずつ単語帳を与え、読書をして意味がわからなかった言葉を書きためさせた。そして、その裏には言葉の意味を調べさせる。国語科で行う意味調べとは違い、読んでいる本が一人一人違うので子どもによってマイディクショナリーの中身は変わる。また、読書だけではなく、テレビやインターネットで知った言葉や、家族や友人が使っていた言葉など、どんな言葉でもマイディクショナリーに入れる「新語」とした。子どもたちは、自分にとって意味のある言葉、新たな出会いとなる言葉をどんどんためていった。新語が一つ増えるごとに単語帳の紙も一枚増えていくので、自分の新語がどれだけ増えたのかが実感できるものであった。現在、一番多くの新語を書き込んでいる子で単語帳5冊目になっている。



図1：新語を意識した読書活動

この取り組みを始めてから子どもたちは辞書を引くことや、担任や友達にわからない言葉の意味を聞くことが増えた。今までの読書では、わからない言葉があったとしても、大まかな意味で読んでいたり、読み飛ばしていたりしたところでも「新語」を増やす目的をもって読むことで、言葉に対する感度が高まっていることを感じる事ができた。これは、国語科でつきたい言葉に対する感性を磨くことにも繋がった。「マイディクショナリー」は楽しみながら言葉に着目する子どもたちを増やす取り組みとなった。

「マイディクショナリー」を通して生まれた他者との交流は「新語」の交換だった。集めた言葉の中から、

自分が気に入ったものを友達に紹介した。それが、友達の読んでいる本や、興味がある言葉に気づくきっかけになっていた。



図2：新語を紹介する

また、どのように「マイディクショナリー」を活用しているのかを交流している子どもが見られた。読書や言葉を通しての交流をすることで、子どもたちは楽しみながら単語の意味調べをし、そして他者とのつながりを生み出していた。今までの、国語科での意味調べでは見ることができない姿だった。

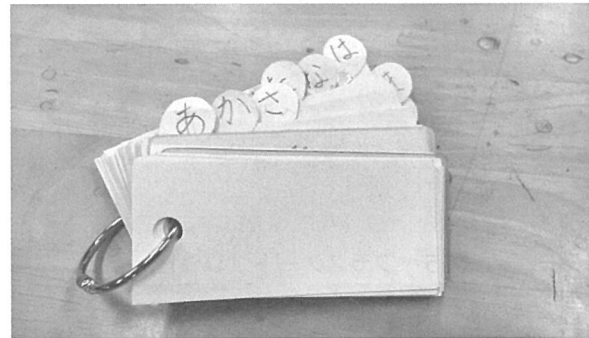


図3：マイディクショナリー活用法

3. 2. プラスノート

読書タイムのもう一つの取り組みとして「プラスノート」を子どもたちには書かせている。このノートには、日々の読書に関連することを書かせるようにした。日々の読書を記録することで、自分自身の読書量や読書体験を知ることができる。また、読んだ本について自分の考えや想いを表出することで、自分の読書傾向も振り返ることができる。そして、それを次の読書に生かして欲しいと考えている。実際のノート活用例として、読んだ本の感想、好きな登場人物の言葉(名言)、好きな場面の絵、本のランキングなど、楽しみながら読書を振り返る子どもの姿が見られた。これまでの取り組みから、子どもたちは自分の読書経験を記録することで自分の読書の実態に気づくことができた。同じ傾向の作品が好きなことを知りランキングに表していた。これは、同じ傾向の作品を自分の中にある読書の

視点で比較していることを知ることができた。同じ傾向の作品を好んで読んでいる子には、教師から他の作品を進めたり、また同じ傾向の違う作者を紹介したりすることができた。今までは、漠然と子どもの読書経験を見ていただけであったが、本実践ではノートに記録させたことで、より確かな子どもたちの読書の様子をみとることができた。

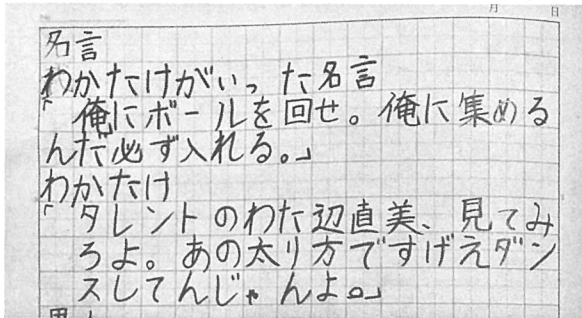


図4：プラスノート（名言）

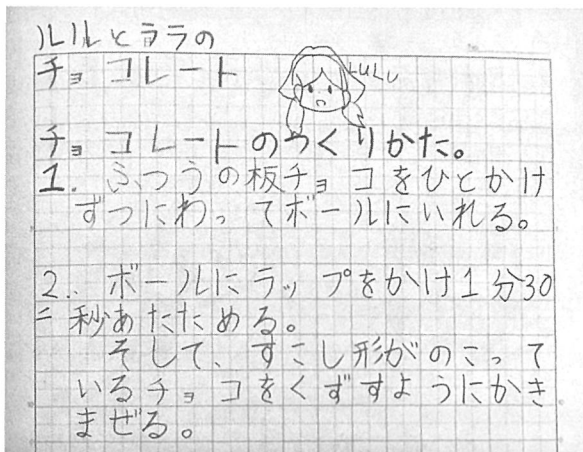


図5：プラスノート（レシピ）

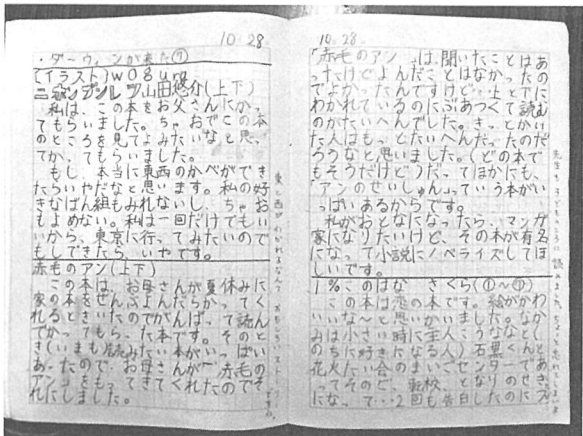


図6：プラスノート（感想文）

また、子どもたちの中には、読書経験を共有する子どもたちも出てきた。クラスの友だちに紹介したい本など考えながら読書を楽しんでいた。しかし、本実践ではクラス全体での取り組みにまでは広げることができなかった。一部の子たちにとっては、読書を通して友だちとつながることができたが、それがプラスノ

トによって育てることができたのかは検証ができていない。本実践では、読書を通しての他者とのつながりを生み出すための取り組みなので、今年度の終わりに向けて検証方法を考え、明らかにしていきたい。

3. 3. 読書と国語を関連させた授業作り

【「白いぼうし」の実践】

読みをつないで、マイチャレンジを進化させよう

教材は、不思議な女の子が登場するといった、ファンタジーの要素をもった作品である。色やにおい、情景などに関する表現も豊かで、想像を膨らませながら興味をもって味わうことができる。登場人物の松井さんや女の子の言動や行動などから人柄や様子を読み取ったり、情景描写を味わったりすることができる考えた。一人で読んでいてもイメージは膨らみ作品の世界を味わうことができるだろう。しかし、一人一人の読みは多種多様であり、同じ結論に至ったとしても根拠となる視点に違いが生まれることが考えられる。そのずれを大切にし、学習を進めた。いろいろな読みの視点を交流することで、自分と友達の感じ方や受け止め方に共感したり、違いに気付いたりしながら、考えを広げたり深めたりさせようとした。そうすることで、友達と考えを交流する素晴らしさを感じ、友達とのかかわりの中で意欲的に自分の考えを更新し続ける子どもが育つと考えた。

そのために単元では、子どもたちの様々な読みの視点をもたせるために、二つのしかけを考えた。一つ目は、子どもたちのずれを生み出すための問いの精選であった。この実践で子どもたちが考え、深めていく問いは子どもたちからの疑問がもとにした。しかし、そのままの疑問を問いにするのではなく、子どもたちが本文の中から根拠を明確にしながらか自分の読みをもてるようなもの精選した。また、その読みの根拠となる視点も多様なものが生まれる問いを設定する必要があった。異なった視点で読み取りを行うことで一面的な視点での読み取りではなく、奥行きをもった多面的な視点で物語の世界を味わうことができると考えた。二つ目は、単元の終末に行う言語活動を選択させることである。この単元ではそれを「マイチャレンジ」とした。それぞれが自分のマイチャレンジを達成することを考えながら学習に取り組むことで、同じ問いを解決する際にも、自分たちはこの作品をこのように表現したいからという表現するための視点をもたせたいと考えた。また、その視点が全体での話し合いを通して新たなものに変容させたいという願いのもと単元を構成した。

単元の導入での「マイチャレンジ」を考える際、自分が行ってみたいことという視点で考えさせた。そして、同じ言語活動を選んだ友達で小グループを組み、最終的な発表をするグループとした。一人一人が学習の主役となってほしい思いはあるのだが、本単元では

グループでの追究を設定した。そうすることで、子どもたちに相談できる安心や協力できる喜びが生まれると考えた。また、それぞれ異なったマイチャレンジを意識することで、全体での交流では異なった視点での読みが生まれ、自分たちのマイチャレンジを意識した振り返りにつながると考えた。子どもたちからの疑問から生まれた問いは、授業での全体学習で行い、それをもとに深まった自分の読みは読書プラスの時間を使いグループでの話し合いや、発表準備の時間とした。子どもたちが考えたマイチャレンジは音読劇、紙芝居、ブックトーク、新聞作り、レポートの5つであった。

【実際の授業の様子】

女の子ともんしろうの関係を考えることで、友達読みの視点の違いに気づき、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。

※女の子ともんしろうの関係を交流する場面。

ゆき：私はもんしろうだと思います。理由は16ページに書いてある、「行っても行っても…」のところだと思います。普通の人だったら町とか行ったら、四角い…とか言わないと思います。

ひさのり：でも、四角いだけでは、わかりません。三角の建物とかあるかもしれやんから。

T：(ひさのりの) 言いたいこと言える？

C：ひさのりくんの言いたいことは、行ったことのないことを四角いところと言ったと思います。

全体での話し合いが始まってすぐのところ「四角い建物」についての発言がゆきから出た。それに対してひさのりがつながっていったところ、この場面では子どもたちは建物を「四角」という言葉で表現するのは人間ではなく蝶なのではないかという話になった。

りょうた：女の子はもんしろう。「四角いところ…」のところ。下からだと四角だけど、上から見ると、三角ってこともあるから、それは、上から見ているから、もんしろうだと思います。

(C：前で絵を描いて説明)

C：ちょうが、たとえば松井さんが開けたときに逃げて行って、柳の上に行って…(前に行って図で説明)柳の上に行って、18、19の絵のところ、柳の木の向こうに、茶色の建物があって、建物の間を歩いていくことが、四角い建物ばかりだもんってこと。

T：確か、昨日、みんなの話やったら、下から見てたやん。でも、ちょうは、上から見ているってこと？教科書にも「高く舞い上がると」ってあったよね。

りょうたの発言をきっかけにもう一度「四角い建物」のところ話し合いが戻った。最初に出たゆきの読みとは違い、「四角い建物」を視覚的にどこから見ると四角に見えるのかという話になった。横から見ると三角に見える建物屋根のところも、四角錐を上から見ると四角い建物に見えるという読みだった。これは蝶ならではの視点で見ると建物は四角に見えるというもので、同じ結論ながらも子どもによって読みの違

いが生まれていた。

この授業やこの後の授業でも、子どもたちは自分たちの疑問から生まれた問いに関しては、様々な読みをもとに自分たちの考えを交流し、自己の考えを更新していく姿が見られた。しかし、問いについて考えることと「マイチャレンジ」とのつながりが薄く、授業中にもそれぞれのマイチャレンジの立場からの発言が出ることはなかった。これは、教師による仕掛けや単元計画が適していなかったと考えられる。子どもからの疑問は初発の感想でのものであり、マイチャレンジをする上で出てきた疑問ではなかった。それぞれのマイチャレンジを設定させたことで子どもたちが主体的に取り組む姿は知ることができたが、全体で深める問いとのつながりをもたせることができなかった。

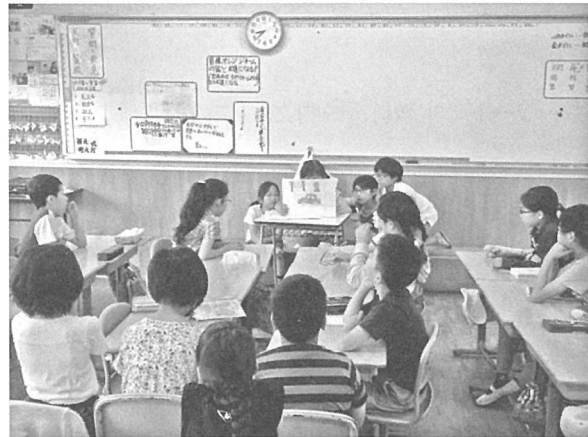


図7：マイチャレンジの発表

4. 成果と課題

本研究では、読書を通して友達とつながることや、読書と国語の授業をつなぐことを目指して取り組んだ。成果としては、いくつかの仕掛けを作ること、ただ毎日決められた時間を読書するという読書体験から、自分の読書を知り、自分の読書を見直すための取り組みになった。それが、子どもたちをみとるためのものとなり、今まで以上に子どもに対する支援や評価をすることができた。しかし、他者とのつながりの部分や授業とのつながりの部分では、まだまだ改善すべき点が多い。この実戦が、本当に子どもたちの実態とあっているのか、これから学習する教材とあっているのかということを吟味する必要がある。今後の、読書と国語科とのつながりを明確に意識した実践を研究したい。

参考文献

文部科学省 小学校学習指導要領解説 国語編
松本修 (2015) 読みの交流と言語活動 玉川大学出版部